

イラク戦争54日目に、盲目になり肉体に障害を負って帰国したサム・ロス【Sam Ross】は、アパラチアの小さな落ちぶれた町で未曾有のパレードに迎えられた。彼の祖父は「これでダンバーの町は有名になったもんさ」と言う。

そのときはそうだった。が、今、24歳のサムは殺人未遂・襲撃・家族用トレーラー放火の容疑で起訴されている。トレーラーにいた人は怪我もしなかったが、現場に駆けつけた消防団員と争い義足をはずして州兵を脅したという。

警察は郡の刑務所に彼を拘引、彼はシートで首吊りを図った。精神病院に入れられ、帰還歓迎のファンファーレ以後の連鎖的下降の歳月を過ごした彼が必要とした援助を受けられるようになった。「帰還したときは英雄、いまはロクデナシさ」と彼。

苦難ばかりの少年時代から勲章に輝く戦争英雄へ、そして苦渋にまみれた成人へと弧を描く人生。軍隊に志願して未来を創造しようとして、バグダッドで弾薬処理作戦中にその努力は爆裂したのだ。20歳だった。

母とは今も疎遠。父は彼の継母を殺害して終身刑で服役中。他の多くの重傷復員兵が頼っている家族・親類の支援は彼にはない。

彼に関心を寄せる人の中に、ペンシルヴァニア州選出の、かつてタカ派民主党員だった下院議員ジョン・P・マーサがいる。2005年にイラク戦争反対を公言したとき、彼に重大な影響を与えたものにロスの打ち砕かれた人生を挙げた。

マーサは、軍の保健担当部局との交渉を援助し、マサチューセッツの非営利グループはロスに美しい丸太小屋を建ててやった。軍医たちはロスのからだの傷口——視力喪失・片方の聴力喪失・左足の膝から下の喪失——を慎重に手当した。

しかし、そういう援助もロスを孤独と絶望から救うことはできなかった。最後は目を覆うばかり

の轟音で終わるイラクとつながる毎夜の悪夢を含めて、深刻な心的外傷後ストレス障害（PTSD）に押しつぶされて、アルコールと違法麻薬で我流治療に走った。州の精神科病院に入ったときは、まさにどん底にあった。

「17回も自殺をはかって、もうやめなきゃ。助けてくれと泣き叫ぶけど、だれも気にしない。だけど最後には誰かが気遣ってくれる」と彼。

ペンシルヴァニア州南西部のファイエット郡は、かつては炭鉱で栄えた中心地、今は州の最貧郡の一つ、そこにダンバーの町がある。ロスのトレーラーに「我らが兵士たちを支援しよう」と書かれたリボンは黒こげで、立ち入り禁止の掲示がしっかり立つ。父が彼の義母を射殺したトレーラー。イラクから帰還したあとロスはここで一人暮らしをした。一番新しい同居人は兄だが、火災のときは刑務所に入っていた。

ロスの喧嘩の絶えない一族は、看守がいるかと思えば囚人がいる、警官がいるかと思えば執行猶予の人がいる。

ロスが生まれたときから、両親は喧嘩ばかり、ときには銃を向け合って。離婚して母は州から出ていった。2001年、ロスは高校を卒業。大学へ進みたかったが、12歳から面倒を見てくれた祖父に資力はなかった。

ファイエット郡はお先真つ暗と感して、出口を探した。2001年後半のある晩、テレビの「君の可能性を伸ばせ」広告を見て、商店街へ行き軍隊志願を手続し、戦闘工兵になると署名して3000ドルのボーナスを手に入れた。

基礎訓練を受けてまなしに軍隊は彼の救世主に思えた。「軍隊向きに生まれたんだ。アドレナリン常習者みたい。軍律は望むところ。冒険欲旺盛。愛国心熱烈。恐れるものなし。戦争人間ということだ」と彼。

2003年になって、彼は落下傘兵となりクウェートに向けて出航、3月の侵攻でイラク入り。やがて、工兵隊員として弾薬集積任務に就く。3月18日、ロス二等兵と彼の分隊は南部バグダッドのある地域の地雷除去に向かった。

敏速に移動しながら不発弾を15個集めた。何かで爆発が起きた。

「最初の爆発の直撃を受けて感覚が麻痺、ただ静まり返った。やがて、”ロス、ロス、ロス”と怒鳴る声だ。だんだん大きく聞こえてくる。全身ずたずたで、血を噴き出していた。意識は戻ったり消えたり。目玉が飛び出るほど泣き喚いでいたっけ”ほっとかないでくれ、ほっとかないでくれえー”ってね」

ワシントンのウォルター・リード陸軍病院に初めて見舞った親類は、昏睡状態のロスを見た。祖父は言う、「あいつは死んでたね。ベッドに横たわってたのは死骸だったよ」。

意識が戻らないまま、軍は彼を除隊処分した。入隊して1年4カ月18日だった。31日経って人工呼吸器がはずされた。両の目と脚をしつこく指差した。叔母がおそるおそる伝えた、目は見えないの、そして脚は切断されたのよと。彼は何日も泣き続けた。

元海兵隊大佐のマーサ下院議員が病院にロスを見舞い、名誉の負傷勲章を贈った。マーサは戦争開始以来、負傷兵を定期的に見舞ってきた。ブッシュ政権の戦争処理にたいする幻滅もあって、この見舞い活動の結果、2005年後半になると軍の6カ月以内の撤退を要求するに至った。「サム・ロスがインパクトになった。この戦争に軍事的な勝利はないよ。勝利を語るがサムのような個人にもたらす戦争の結果を忘れていくということだよ」。

続く3年以上もの間にロスが受けた外科的治療は20に及ぶ。右目5回。左目1回。左脚切断2〜3回。右脚3〜4回。喉・皮膚移植・胸管2回。臍から鼠径部まで腸から金属片を摘出するための開腹1回。

ウォルター・リード陸軍病院で診断されたPTSDのための入院治療は受けたことがない。

2003年晩夏、晴天のものとのパレードは見ものだった。小旗を打ち振る地元民が何百人も通りを埋めた。ロスは21歳になったばかり。グリーン制服、バーガンディー色のベレーで

ジープに乗り、後ろに他の退役兵たち、高校生のマーチング・バンド。ロスは欣喜雀躍、有頂天だった。潜在能力のきらめきを感じ、大学、それも法学部に進めない訳はないと想う。

ところが、暗澹たる気分とパニックと焦燥感が襲いかかる。慢性的な痛みが取り憑く。金属片が体中を攪乱する。彼は自分が障害者であることを否認しようとする。好きな魚釣りをやってみるが、目が見えなければ竿を入れるべき場所もわからない。道具を水中に捨て、ボートも売り払う。「あきらめたんだ。なにかも断念だ」と彼は言う。

負傷して1年後、シカゴの失明退役兵用の入院治療を登録。ブライユ点字法を学ぶが、指の感覚がなくて読めない。何も習得できないとの思いで、この治療計画はやめた。ピッツバーグの退役兵病院での外来精神科治療も拒否を繰り返した。病院では敬意を払ってくれなかったからという。

2004年、彼は世間から逃れて、丘の上のトレイラー暮らしに入った。祖父と財産権でいざこざが起き、放火で決着をつけようとした。イラクに行く前にはなかった警察沙汰が始まったのだ。

2005年はじめ、マーサ議員は、ロスとその犠牲的精神を敬愛していると伝えようとして、ファイエット郡病院で名誉の負傷勲章を祝う二度目の式典を開催した。

ロスは政府から不運な負傷に対して10万ドルを給付され、祖父の土地の隣接地を購入した。2005年5月、ガールフレンドと絶交、落ち込みがつる。気力が失せる。ある日、トレイラーのドアに自殺ノートを貼り付け、森の奥へ走る。捜索が丸1日。その夜は森で眠り、朝の太陽が顔に射して、神様は俺に生きていて欲しいとお思いなのだ、その微なのだと思える。見つけられて、精神科病棟に連れられ、数週間後に放免される。

自分の家を建てるのは気晴らしになった。白松の丸太で小屋を作ってくれたヴォランティアの友情はうれしかった。だが、「第二の天国」と

命名した家が2006年初めに完成すると、「みんなが去り、俺が入り、全くの一人っきり。それが麻薬の始まりさ」。

初めは、**覚醒剤**、**ヘロイン**、**安価な濃縮コカイン**、**合成麻酔剤**。気を休めて人寄せするため。地域のしがない連中が寄ってきて楽しんだ。が、彼らは麻薬中毒者。ストリップ・クラブにロスを連れて行きロスに勘定を払わせた。ガールフレンドのバーバラが同棲した。親類とは縁遠くなった。

去年の秋、ロス是不法麻薬はやめて、酔いっぷれるまで酒をあふった。

今年2月、叔父が、**PTSD**の入院治療を申請しにコーツヴィルの退役軍人用病院に車で数時間かかるが行くように説得した。病院は彼の病状の深刻さを見て、即座に承諾、ヴァレンタイン・デー直後の入院を決めてくれた。

ロスは入院前の5日間、麻薬でハイになった。**抗鬱剤**を買う電話を立ち聞きした兄のガールフレンドのモニカは、てっきりコカインを買う算段だと思ひ込み、ロスはそんなことを自分の姉や兄に伝えられてはと心配になった。ビールを何本か飲んで、怒り狂って、今はモニカが息子と暮らす彼のものだったトレイラーへ行く。ドアを激しく叩き、入ると、ここを燃やすぞと脅す。まさかと思つたが、実際ライターをつけたのだ。トレイラーは家族の災厄の元だとの思い込みも合った。衣類を束ねて燃やした。モニカと子どもは逃げた。消火に駆けつけた人をロスは首を絞めた。

判事は**25万ドルの罰金刑**を裁決した。独房のロスは手の施しようがなかった。事態は悪化して、ついに彼は首吊りを図つたのである。

(2007・4・5『ニューヨーク・タイムズ』デボラ・ソントグのダンバー発の記事の抄訳・6・4須田稔)

4月16日 生命を奪われた

無防備の32人が

ヴァージニア工科大学で

武装兵士6人が

遠い異国イラクの地で

4年前に戦争を始めてから、3400人以上のアメリカ人がイラクで死んだ。1日二人以上の割合だ。今年早々の30000人の増派で、比率は上昇。宗派間暴力はバグダッドで少し減っているのにアメリカ人の犠牲者は増加。4月と5月の2カ月で死者は少なくとも220人。

イラク市民の死者4月1498人、5月1951人。イラク軍死者63人、46人。警官128人、127人。武装集団219人、297人。(イラク内務・国防・保健3省の6月1日発表による)

ジェシー・ドウ・ラ・トーレ、海兵隊・29歳。イリノイ州。中高生時代は有能なサックス・プレイヤー。父は不同意だったが、05年に海兵隊に志願。「私が支持しない戦争で息子を殺された」怒りと悲しみの父親。

ダニエル・シェリー、海兵隊・20歳。オハイオ州。「せめて大学卒業してからにして」との母の懇請もむなしく志願。任地到着の1週間後、装甲車で移動中に感電死。

マリオ・デ・レオン、陸軍・26歳。カリフォルニア州。2002年、アフガニスタンでの任期を終え、GIBILを利用して専門学校に。結婚して子どもが生まれ、軍隊でキャリアを積みば生計も安定すると、昨年10月バグダッドに。母は米軍の帰還を望んでいる。

ショーン・ブルー、海兵隊・25歳。カリフォルニア州。南カリフォルニア大学とともに学び海兵隊でも同僚のマイク・ベルは、戦争が始まったとき、「ぼくらみんな戦場へ行きかけた」「彼も戦闘したがってたよ」と回想。

アーロン・ジュネヴィー、陸軍・22歳。カリフォルニア州。母はイラクには行ってくれるなど説得したが。

ルーカス・スターセヴィッチ、陸軍・25歳。イリノイ。母に「ここバグダッドは地獄が呼んでいる」、父には恐怖をイメール。(『タイム』誌6月4日号「イラクのある日」より。6・5須田